

第5回 令和の魅力と活力ある県立高校のあり方検討委員会 議事概要

1 日 時 令和4年11月11日(金) 10:00～11:45

2 場 所 富山県民会館 401号室

3 委員出席者 金岡 克己 牧田 和樹 伊東 潤一郎 尾畑 納子
河上 めぐみ 近藤 智久 品川 祐一郎 白江 勉
本江 孝一 本島 直美

4 会議の要旨

司会が開会を宣した。

議事事項

○ 県立高校のあり方に関するアンケート調査結果について

事務局から資料に基づき、本会における検討事項の確認と検討に当たって参考とする事柄などについて説明した。

(委員長)

アンケート調査の質問が多岐に渡っていますので前半と後半に分けさせていただきます。具体的に言うと、前半は資料2-2の結果概要の項目番号で1～8、ページ数では4ページから39ページまで、後半はそれ以降に分けて進めさせていただきます。それでは、前半について皆様のご意見を賜りたいと思います。

(委員)

学習内容について、様々な進路希望に応じた多様な学びということがこの検討会の中でも話題になっていました。このアンケートの高校生の結果からは進学に役立つということで普通科の希望者が多く、進路希望に応じて選択できる多様な科目という意味で反応が出ているのかなと捉えたところです。これを踏まえ、どういう形がよいのかなと考えてみると、普通科であっても複数の科目を受講できるということになれば、そこには指導に関わるスタッフも必要になってきます。それを実現するには、県内には普通科と職業科が併設された高校があるので、例えば職業科に主に関わっておられる先生方、そこで開設している科目、それが普通科に所属している生徒であっても進路希望に応じて必要とする学びを選択できるような柔軟な運用もあるのかなと思います。これがすべての学校で実現できるかは大変難しいところですが、入学時には共通科目を学びながら2年、3年と進むにつれて進路に応じた多様な学びのできる体制作りというのも検討課題、視点としてあってもよいのではと思います。

(委員)

アンケートの保護者の回収率が低いと感じました。アンケートをしなくても今の状態で

満足しているのか、子どもに任せているからこの数字なのかが気になりました。しかし、回答を見ると保護者が思っていることは同じなのかなと感じました。アンケートの結果からはパーセンテージの高いものを捉えがちですが、その他の意見も気になっています。高校を選ぶときには服装のデザインや兄弟の存在、本人の希望を尊重するなど子どもや親の素直な気持ちが見られると感じました。

(委員)

進路希望の選択肢のところですが、就職、大学、専門学校となっています。私は、起業するとか独立するとか中学時代、高校時代に考えている方がいるのか、いるのであればどれくらいいるのかということを知りたかったのですが、このアンケートの選択肢からは見てとれないなと思っています。大学に行くための勉強もしくは就職するために高校に行って学ぶという道筋がついている気がしました。選択肢に様々な項目があることで、アンケートをすることが中学生、高校生が将来を考える選択肢を広げてあげることできるのかなと思って見ていました。

クロス集計に回答者の違いがはっきりと出ていると感じました。企業が一番求めているのは「何事にも積極的に取り組む姿勢」であるのに対し、高校生ではあまりその割合が高くない。しかし、これはとても大事な差異かなと思います。このような差があるところが人材を育てる、育て方を工夫していくという点で考えていくことができる部分なのではないかと思います。

(委員)

高校に関する情報収集の結果を見ると、中学生の皆さんは高校の学校案内やオープンハイスクールからかなりの情報を得られていると改めて感じました。高校2年生は、2年前コロナでオープンハイスクールができなかったので割合が低くなっていますが、中学3年生の実態が現状を表していると感じています。私たちは現在、スクール・ポリシーを策定し本校ではこういった取り組みをしますということをお知らせしていますが、これからも生徒と顔を合わせられるオープンハイスクールなどで発信していきたいと思っています。

高校で身につけることについては、基礎的な学力や専門的な知識・技能、企業からはコミュニケーション能力、他者との協働、積極性などを身につけることが求められており、座学の授業でももちろんですが部活動や学校行事などの総体として、生徒を育て上げていくというスタンスで学校教育に取り組んでいきたいと思っています。

高校生活の満足度については前回調査との比較もあり、そのときよりも高くなっていることは率直に喜ばしいと思いました。一方、クロス集計の中にもありましたが、「満足できていない」という生徒がいるのも事実です。教育活動の中で、生徒はいろいろな思いをもって先生方に語りかけてきます。それぞれその場に応じて、子どもたちの意見を聞きながら教育活動にあたっておりますが、100人が100人とも満足ということは状態としてはないのだろうと思っています。しかし、満足度が高いということは学校としては喜ばしいことと思っています。

(委員)

高校選択で重視するところで、成績がとても影響しているということが大変よくわかりました。これは当たり前なのですが、とりわけ親御さんとの影響が大きいのかなと思っています。多様な社会と言いつつも、やはり成績というもので進学を決めているという実態が調査でわかったと思います。

情報の収集という点では、高校2年生はちょうどコロナ禍ということであまり中学生の時に高校を見られなかったようで若干背景が異なっているのかもしれませんが、「見て感じてくる」ということが進学に少しでもいい意味の影響を及ぼすのであれば、将来的にもどんどんやっていただきたいと思います。

身につける力について企業の方と学校関係や子どもたちと違うという点で、「社会人として必要とされるコミュニケーションの能力」という選択肢は、何を指しているのか分かるようでわからない。企業のどのような立場の方がこのように答えていらっしゃるのかもわからないと思いました。

学習内容について望むことに「進学に役立つ科目の時間を増やす」の回答が高かったことは少し寂しいなと思いました。進学に対してとても効率的な考えが強くなっており、進学に役立つ時間、科目を増やすことに意識が向いていることに対して、今後教育内容をどのようにしていくか、是非しっかりと考えていただきたいと思います。一方、中学生は人文科学やスポーツといったことに興味を持っており、保護者はデータサイエンスや国際理解のことをやってほしいと思っており、親と子のギャップがここにもあるなど感じたのですが、アンケートをやっていただいているいろいろな実態が見えてきてよかったと思います。ぜひ、今後の参考に使っていただきたいです。

(委員)

高校選択の際に重視することで、「中学校における自分の成績」が1番なのは当然だろうと思います。私が注目したのは2番目の「自宅からの距離や時間などの通学条件」です。生徒の立場に立ったときに、ある程度の自分の居住エリア内に多様な科目を選択できる学校があることが理想ではないかと思います。遠くまで行くには、単純に時間がかかるという面があるので、全県一区という考えがありますが、そうなったとしても遠くの学校を選ぶのかというと、多くの生徒は近くのところを選ぶのではないかと思います。だから、近くに自分の行きたい科目や学科があることが子どもたちが将来を考えるいいきっかけとなり、ニーズとして大きいのではないかと思います。

(委員)

高校進学の際に重視することとして、自分の成績の回答が多いのですが、実際に入った結果、何を重視すればよいと考えるかということにすごく興味があります。成績が大事と言いながら、実際に入った時にどのような結果になるのか。最終的にそれがやはり成績なのだと言われてしまうと、アンケート結果を全然違った見方で見なければいけないのではないかと思います。

高校生活で身につけてほしいものとして、「社会人として必要なコミュニケーションの能力」の回答が企業で多いように、企業側とすれば人間としてどのように育っていくのかと

いうことを非常に重視したいと思っているのですが、生徒の回答はどうしても進学を考えて学力を上げることが高いというところが非常に気になっています。

これは疑問に思ったことなのですが、興味や関心がある学習では、中3保護者が「外国語や国際理解に関すること」を約半数の人が回答しているのに対し、高校生活で身につけてほしいことでは、「語学力や国際感覚」という回答が低いという結果になっています。データの矛盾を感じており、身につけてほしいことは何なのだろうかと疑問に感じました。あと製造業をやらせていただいている立場からは、中学3年生の子どもたちがプログラミングやデータサイエンスではなく、歴史や人文科学を選ばれているのはなぜかということに疑問を感じました。

(委員長)

今のご質問については事務局の方で後程お答えをお願いします。

(委員)

率直な感想として、保護者、地元の企業の立場としては非常に納得感がある結果だったと感じています。例えば、高校生活で身につけることで、生徒や教育関係者の方が進学のための学びを回答する割合が高いのに対し、企業は低くなっています。最近、企業側も人物本位ということが定着しているからだと思います。「語学力や国際感覚」については、企業といってもどのような企業か、また、どなたが答えているのかという話が先程出ましたが私も同感で、採用担当とかアンケートを回答した企業が地域企業ということであればニーズは少ないでしょうし、グローバル企業であれば高いだろうと思います。回答する対象の影響があるかと思っています。興味や関心のある学習について、例えば外国語とかプログラミング、データサイエンスは、生徒はそれほど高くないのに対し、保護者は非常に高いという結果でした。これはその後の進路選択、職業選択の幅や社会に求められているものということを保護者の皆さんが肌で感じていらっしゃる一方で、生徒の皆さんは自分の興味の中ではそれほど高くないということで印象に残りました。

毎年新入社員意識調査をやっているのですが、学卒の新入社員の皆さんは自分のやりたいことや頑張りたいことをできる職場を探しており、会社というものに対するロイヤルティがどんどん低下しているというのがここ数年の傾向、もしくはZ世代や最近の学校教育を受けられた新入社員の傾向となっています。それは社会の流れであり国際的な流れでもあるので、企業はそれに対してパーパス経営やエンゲージメントなど会社という組織を性質のいい集団にして、そこで自己実現を図ってもらえるように新入社員や若手社員、社会に対してピーアールするというのが最近のトレンドだと思います。このアンケートからも生徒さんはより自分の興味や関心、やりたいことを重視するのに対し、企業側はそのギャップを感じながら、パーパス経営やエンゲージメントといった新しい概念・理念に取り組んだり、職員のロイヤルティを上げようとしていたりしていることが裏付けられたし、学校の先生方や教育関係の皆さんは、進学ということに重きを置いていらっしゃるということがデータで裏付けられたのかなと思いました。

(委員)

全体を通して、戦後7,80年が経って、単線型教育制度が定着してきたということが読み取れると思います。これについては後半に触れますが、私は3つの項目に注目をしました。

まず1つ目は、高校選択の際に重視することについて、「中学校における自分の成績」の回答が高いということです。これは基本的に高校入試制度が変わらない限りは変わらないわけで、高校入試が試験の点数で基本的に合否を決めている以上は、成績ということが中心になってくるのは現実だろうと思っています。ただ注目すべきは、前回のアンケートと比較するとそれぞれの対象者において数字が下がっているということが読み取れます。これは本当に重要視しなくなったのか、もしくは中学校の方で成績を中心とした進路指導ではなくなったのかのどちらかだと思っています。

2つ目は、高校生活で身につけることということで、高校2年生と卒業生、企業の人たちは基礎学力を求めているのに対し、教育関係者は「問題や課題を発見し、解決していこうとする力」いわゆる応用力を求めています。ここにギャップが見えてきて、ある意味これが現実の高校生と教える側との認識の違いとなっており、私はこのギャップに注目すべきだろうと思っています。

最後ですが学習内容の満足度ということで、クロス集計していただいた内容ですが、卒業生について希望していたところへ行った人の満足度は「満足している」と「どちらかといえば満足している」を合わせて89%と高いのに対し、どちらとも言えない人たちについて同じように合計すると64%に落ちています。そして、希望していなかったという層になると33%しか満足していないのです。ここにも課題が隠れているのではないかと思います。

(委員長)

ここからは後半に移らせていただきます。

(委員)

先程、単線型教育制度と申し上げたのは、基本的にこれは大学まで一貫の制度であり、小中高大とそこまで行くことを前提に組み込まれているものなので、このデータで見える通り、子どもたちは大学に入るまでいろいろなことを学びたいと思うわけです。つまり将来の選択肢は大学に入ってから決めるというのが単線型のねらいですから、まさに子どもたちはその通りの小学校、中学校、高校生活を送っているのです。ただ、これは途中で道が分かれていくような複線型の教育制度ではないので、逃れていくことはできないという子どもたちにとって不幸なことが起こるものとなり、子どもたちの格差が助長されている現実があります。アメリカは単線型の教育制度なのですが、アメリカでは大学で調整をしているわけです。大学までは簡単に入れますが、出すことについては簡単に出さない。だから、生徒は必死になって最後帳尻を合わせるようにするのですが、残念ながら我が国では、大学はまだ複線型の感覚でいらっしゃるので、入るのは難しいかもしれませんが入ってしまえばそのまま出していこうということになります。そうすると単線型で苦しんできた子どもたちはずっとそのまま頑張ることなく社会に出ていってしまうこととなり、今度は社会がその子どもたちを受け入れていかなければいけないという現実が生まれるわけです。ですから、大学に期待できないのであれば単線型に苦しんだ子どもたちをどのよう

に立ち直らせるかというプロセスを高校という段階で考えなければならないのではないかと考えています。そのようなことが今回のアンケートから読み取れたように思います。

(委員)

普通系学科と職業系学科の定員の割合について、「わからない」という意見も含めると概ね現状のままでよいのではないかと教育関係の皆様や生徒の皆さん、卒業生も含めた皆さんが思っているのではないかと考えました。高校生活に対する満足度や学科やコースに対する満足度についても、生徒の皆さんや保護者の皆さん、卒業生の皆さんは、「どちらかといえば満足」「どちらとも言えない」も含めれば概ね満足している状況です。これを見ておきますと、現状の普通科、職業科のバランスや学科・コースの現状ということについては、それほど問題はないのではないかと考えます。

私の業界では自動車整備士という職種があるのですが、最近普通科卒業の整備士が増えたり、自動車にはあまり興味がないのですが14歳の挑戦ですごく良さそうな職場だったため自動車整備士になろうと思ったりと、自動車が好き、機械いじりが好きというメンバーがどんどん減り、本当に多様な観点で職業を選ぶといった職業選択の幅がどんどん広がってきています。一方で、工業科や職業科卒業の方が安定して働いていらっしゃる企業さんもある現状を踏まえると、多様性も確保しつつ専門性も提供するという現状の形がニーズに合っているのではないかと考えます。現場の感覚からすると、早くから進路を決める人もいれば様々な理由から職業選択をするといった働く人の主体性が高い意味で重視されている世の中において、高校教育は現状の状態でもいいバランスを保っているのではないかと考えます。

(委員)

圧倒的に普通科に行きたいという子どもたちが多いという状況の中で、職業科に行きたいという子どもは少なくなっています。では、なぜ職業科に行きたい子どもが少ないのか、それは成績順だからということではないでしょうか。富山県の高校は偏差値順になっていますが、子どもたちが高校の時にいろいろな選択肢を見直すことができる、幅があるような方法を作っていけないのだろうかと考えます。それができれば、もう少し違った考え方が出てくるのかもしれないと思います。高校に入った時と高校3年間を終え卒業する時に「こんなことをやりたいから」と考え方を变えることができるというか、いろいろな体験をすることで自分の進む先を変えてみたいと思った子にチャンスが与えられるような考え方で、学科の設置や高校の設置ができれば、今と違った富山らしさというものが出てくるのではないかと考えて今回のアンケートで感じました。

(委員)

どのような高校があれば良いかについて、中学3年生の一番は、「多くの友達ができる学校」「友達との関係を深めることができる学校」つまり人間関係を重視しているという結果となっています。企業ではコミュニケーション能力が高く、友達同士で関わり合う機会をできるだけ多く持ち、人間関係をうまく築いてほしいという願いを持っておられます。砺波市でも授業改善を進めており、主体性を育む授業がすべての学校でうまくいっているわ

けではないのですが、うまくいっている学校では子どもたち同士の関わりや対話をフリーにやっている場面をよく見ます。席を離れて「教えて」というような風景が見られています。子どもたちの表情を見れば歴然と「楽しんでいるな」と感じられます。

先日、広島県の平川教育長の講演を聴きました。その中で県でバリューチェーンを作りたいということから、商業高校でビジネス探究プログラムを作りカリキュラムを作っていたという話がありました。授業改善やカリキュラム改善を行うことで成績で普通科を選ぶということではなく、自分の人生を振り返る機会をたくさん持つことができる商業科で学びたい、そこでやりがいを感じられるといった状況があるということでした。富山県ではどこまで進んでいるかわかりませんが、中高の連携も含めてこうした授業カリキュラムを考えていくことが、子どもたちの満足度を高め、さらには実際に企業に入っても活躍できる人材に繋がっていくのだらうと思います。

(委員)

学校規模についてですが、大体今くらい、もしくはある程度のクラス数は必要だと感じています。現在、小学校や中学校で再編が進みつつありますが、高校はそこまではいかにしても、高校生や中学生が思っている「友達ができる学校」を求めていることを踏まえると、それなりの規模は高校でも必要だらうと思います。ただ、公立では費用の問題など様々あるので、できるだけ高校生になった時の中学生の思いを踏まえつつ、学級編制を考えていかなければいけないということがこのデータからわかりました。

大学においては、学部の中を細かく専門で分ける場合と、一括募集し1年を過ぎてから振り分けるということ等種々なケースがありますが、高校でも同じように、普通科やその他の学科の中で入学後に分けていくというようなニーズもあるのではないかと、或いはそのような仕組みも今後、必要ではないかと感じています。

これはお願いですが、設置されていた方が良くと思う学科に対する結果では歴然と数字が出ていますが、このような回答の現状と産業界を含めた富山県にとって将来にわたり必要な、残さなければならないものがあるのではないかとこの視点も残しておいてほしいと思います。

もう一つ、富山市総合教育会議で夜間中学という話が出ました。これは中学ですから県とは違いますが、「県に一つくらい」と文科省も言っているため、施設は県、先生は中学校といったような多様な組み合わせで学び直しができるようになればいいと思います。外国の人たち、例えば製造業で富山にいるような方がスムーズに学び直しができるような環境を作ることも、今後ぜひ検討してもらえないかという話が出ていたので、お伝えしたいと思います。

(委員)

有意義な高校生活を送るための学校の規模について、「規模は気にしない」、「とにかく入ったところ・受かったところ」という感じの数もそれなりにあるなと感じました。一方、2～3学級、5～6学級或いは6～7学級に注目をする、中学生や中学生保護者では規模の小さな学校の回答が多いのに対し、高校生や卒業生は規模の大きいところの割合が少し高いと読み取らせていただきました。

望ましい県全体の高校像については、「学級数が多い学校から少ない学校まで、バランスよくあることが望ましい」が大多数ですが、「学級数が少ない学校が、多いことが望ましい」と「学級数が多い学校が、多いことが望ましい」を比べると、中学3年生、高校2年生、卒業生、企業と中3保護者、高2保護者、教育関係者とで逆の結果となっているのが興味深く見させていただきました。

どのような特色を持った高校があれば良いかにおいては、子どもは「資格の取得や就職に必要な技能を身につけることができる」を選んでおり、先程の委員もおっしゃりましたが、子どもたちは中学卒業後、高校に進学するという状況ですので、そのために何をしなければならないかということに身染みてわかっているのかなと感じました。一方で、先程私も指摘したコミュニケーション能力といった企業に求められるものについて企業は高いのですが、子どもたちは少し低めです。子どもたちは目の前にある目標の実現に向けて努力したり、コミュニケーション能力は、例えば部活動で仲間とともにいろいろな活動をする中で自然と身につくものであったりします。コミュニケーション能力を身につけることを目的に部活動に入ろうという子どもはあまり多くないのではないかと思います。やりたいことをやろうという思いで入っていると思いますので、こうしたずれが出ているのは自然なことなのではないかと思います。

子どもたちが進路実現したいことに向けて、しっかりとした指導をしていくことは教育の必要条件であると思います。ただそれはあくまでも必要条件であり、どの学校も全人教育というかコミュニケーション力の育成を含めて、子どもの成長を見通して送り出すことが使命だと思っています。こうしたことから、子どもたちが望む望まないにかかわらずコミュニケーション力は我々にとっても大切なものであると思います。

(委員)

先に質問が1つありまして、高校規模のところに学級数があるのですが、高校の1学級は何人ですか。

(事務局)

1学級は40人ということで、このアンケートをとっております。

(委員)

1クラス40人ということですね。それを踏まえて、私が注目したのはどのような高校があればよいかということですね。教育関係者において「きめ細かい指導が行われる高校」の回答が圧倒的に高くなっていますが、教育者の立場からは「きめ細かい指導をしたい」という気持ちがこのアンケートに表れていると思います。それに対して、先程1クラス40人ということでしたが、クラスの量なのか1人の担任の先生、2人の先生で見る生徒の量なのかきめ細かさはそのどこにあるのかなと思います。教育の現場に立っていないのでわからないのですが、私は小規模校の小学校出身で、父から「一人の子どもを見る大人の目の数が違うから、この小学校に入れたのだ」と言われたことに納得感がありました。先生方がきめ細かさを求める際、1学級の生徒数についても検討の1つなのではと思いました。

今の時代インターネットなどがとても進化しているので、知識情報だけであればおそら

く高校で学ばなくても意欲があれば調べられると思いますが、高校に求められることとすれば、生身の友人であったり先生との出会いであったり、もしくはその高校で生徒に関わる大人であったりすると思います。実体験や生身の繋がりというものを高校において子どもたちが求めているということが、アンケートの結果ではないかと思いました。様々な資格を取得したい、技術・情報を得たいという気持ちは、教科書の中だけではない実体験、生身の繋がりのようなものを増やしていくことで叶えていけるのではないかと思います。そこに私が力になればいいなと思います。これからも価値を占めるであろう通学して皆と一緒に学ぶ中において、きめ細かい指導と一言で言われていますが、この部分は私も親としても求めているところですし、この結果に対して何か応えられないかなと考えていました。

(委員)

私もどのような高校があれば良いかという結果がすごく気になっていました。子どもたちの回答の中に、「多くの友達ができる高校」や「友達との関係を深めることができる高校」ということが高く出ていたので、高校生活の中で友達との関わりはすごく大きいことなのだと思います。友達がいるから競って勉強するとか部活を一緒に頑張るとか、将来のことを相談するにも友達という存在はとても大きいと感じました。また、友達とうまくやれることは将来的にコミュニケーション能力が育つことにもなると思いますし、高校で友達と一緒に1つのことを成し遂げるといった機会がもっと増えればいいのかなと感じました。

(委員)

どのような高校があれば良いかについて、中学生や高校生と教育関係者も含めた大人の側の感じ方や受けとめ方が違うのかなと感じています。子どもたちが回答している「友達が多くできる」や「関係を深める」ということについては想像ですが、子どもたち同士の間人間関係の中で、「いろいろと切磋琢磨しながら」とか「刺激し合いながら」成長していきたいという気持ちが出ているのかなと思います。一方で、「きめ細かい」の中身にもよりますが、教育関係者はそのような面を不安視しているのかなと思います。しかし、卒業生の学科別結果を見ると、例えば普通科では「きめ細かい指導」ということになると丁寧に勉強を教えてもらえるというようなイメージ、つまりいたところや学びがストップしたところをきちんと指導してもらえるということなのかなと感じます。総合学科では、学年が進み学びが深まるにつれて出てきたいろいろな興味関心にマッチしたような選択肢があったらいいなということだと思います。職業科では、より高い技術やより高度な知識といったような技能の習得、資格の取得も含めたところへ導いてくれる環境を求めているのかなと思います。多様な学びと言ってもいろいろなニーズに対応していくのは難しいところではありますが、高校のあり方を考える大きなヒントになるような結果なのかなと見ています。

私は中学校の教員経験が長かったのですが振り返ると、進路指導において子どもたちが中学段階で将来の進路を決めきれぬか、明確なものを持ち合わせているかと言われるとなかなかそうではないのが現実だと思います。しかし、私たち大人が子どもたちの話を聞きながら、経験・体験を交えて話題を提供する。そして高校でもオープンハイスクールなど様々な機会を設けて、これを十分に生かしながら、子どもたちの視野を広げてやるなど、

子どもたちが進路を選択する際に必要な引き出しを多く持ち合わせているということは、進路指導において大切なのかなと感じています。

(委員長)

前半後半を通して皆様から多様なご意見をいただきました。ここで、欠席された委員の方からもご意見をいただいていると伺っております。事務局からご紹介をお願いします。

(事務局)

2名の委員の方からご意見をいただいております。

(委員)

アンケートの回収率は調査する上でとても重要なことである。さらにはデータ収集の規模や対象、割付け方法により、より公正で評価可能なデータが収集できるかが最も重要である。調査対象と回収状況で、中学生と保護者、教育関係者は回収率が80%程度で高いのに対して、高校生と保護者、企業関係の回収率がほぼ半数である。これは調査対象である県立高校生にとって高校生活や学習内容の満足度が60から70%は満足していると評価するものの、県立高校のあり方として自分たちの将来の学校像が議論され、県立高校の未来を創造し、明日への夢や希望に繋がるという意識を持つことに対しては非常に低い結果となりとても残念なことである。調査対象の区分に公立中学校3年生、県立高校2年生とあるが、学校規模や立地環境、男女比等の属性によっては結果に影響する項目があると思われる。例えば、有意義な学校生活を送るための学校規模については、回答者の学校規模によって左右されると判断できないか。昨今、学校選択理由が行ける学校から行きたい学校選びに移行している傾向から、多段階的な結果分析も必要になる。調査する側がしっかりとその趣旨と方向性を意識し、多岐にわたる属性含む分析ができるような調査を行うことが必要であると思う。調査項目を確立するには、県立高校の未来を創造するための大きな括りで見据え、生徒の実態をしっかりと捉えながら教育内容と学校教育の姿を創造することが必要である。一方で、学校の課題や特化すべきことは学校評議員会を踏まえてその内容について検討され、満足度調査からアクションプログラム及び学校評価に反映してきている。現況の問題点や課題を明らかにし、改善するための方向性を見出すことは大変重要であり、すべての学校で学校評価等において明示されていると思うが、それを活用できないのかと思う。

(委員)

中学生、高校生は自分の現在の学力、成績を強く意識しながら進路を考えているようです。それは自然なことで、生徒にとって最も身近でイメージしやすい事柄である故だと思われれます。一方で、「社会人として」といった項目は、一般論としてのイメージは何となく持っているものの、自分事として具体的に想像し辛いのではないかと思います。

高校に求める項目では、友人関係、人間関係の構築が上位を占めていることも興味深いです。また、通学距離も上位にあり、通える距離で様々な選択肢がある環境が理想であろうと思います。卒業生や保護者、教育関係者、企業側は、在生徒がまだ体験していない

知らないことに対する知識や経験から、学力に加えコミュニケーション能力やプレゼン能力、課題解決力など卒業後の生きる力になることや社会で求められる要素を重要視しているようですが、生徒と大人との間にあるこれらのギャップは互いが想像しているものよりもはるかに大きいのではないかとアンケートを見て感じています。大人が求めている生きる力の重要性を実地で体験できる機会や環境があると選択肢が広がり、多様な考えを持った生徒が育っていくきっかけの一つになるのではないかと思います。また、教育関係者や保護者、企業側も生徒が何を感じているのかを知り、寄り添っていくことが重要だと思います。高校卒業後、進学を目指す生徒が増えているものの様々な学科が選択できる環境が求められていることから、学科を減らさないような工夫が必要だと思います。とにかく選択肢を増やして欲しいという希望がアンケートからは見えていますが、少子化に伴う定員減は避けられませんので、学科横断型の教育の実施なども検討していただければと思います。

高校生が様々な学習に興味を持っていることは良いことだと思います。興味ある学習を深く掘り下げたい、その分野についてさらに知りたいと生徒が思った時に、その先を学ぶための情報や機会を提供できる高校であって欲しいと思います。ただ、高校だけでできることには限界があるので、企業側から連携に関するアイデアが多数出ていることは大変心強いと思っています。企業や自治体などとの連携が学生の興味の活性化や学生の学びの深化に生かされるような体制を作っていくって欲しいと思います。

(委員長)

先ほどのアンケート結果で、中学保護者において語学力や国際感覚における結果に対するご質問がありました。これについてはお答えできますか。

(事務局)

「高校生活で身につけること」に関しては最大3つの選択になります。それに対して「興味や関心のある学習」の方は5つまで選択ができるようになっていますので、その違いがあります。また、「興味や関心のある学習」の方は中学3年生保護者のみであるのに対して、「高校生活で身につけること」の方は中学3年生保護者と高2年生保護者が合わさったものになります。しかし、若干中学3年生保護者のパーセンテージが大きいことはありますが、「興味や関心のある学習」の方の数字がかなり大きいということの差が埋まるかと言われると現時点ではわからないということになります。

(委員長)

おそらくアンケートの設問のとり方といくつ丸を付けるかによって、当然、語学力や国際感覚も大事けどより重要なものから丸をつけられたというギャップなのかなと思います。中3保護者の結果から見るとプログラミングや国際感覚というところを重視されてつけられたのかなという感じがします。

ここで教育長から本日の皆様のご意見も踏まえて、ご意見やご感想があれば賜りたいと思います。

(教育長)

このあり方検討委員会も今回で第5回ということですが、本当に多岐にわたり貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。アンケート調査も幅広い報告でしたが、関係の方のご協力をいただいて取りまとめ、いろいろなことが見えてきたかと思います。ご意見をたくさん賜りましたが、特に思ったことは生徒さんや保護者の方は、進路選択を前にして、例えば成績であったり入試に役立つ科目を学びたいであったり、少し現実的な意見が多い一方、教育というのはそれだけではなく全人教育が必要で、将来に向けたコミュニケーション能力や協調していく力といった幅広いものが重要という中において、学校現場で行われる教育活動の積み重ねが今後も重要だと思いながらお聞きしました。

また、学科やコースの選択に関して、高校入学時に選択してからの学びとなるわけですが、多様性や生徒の思いを大事にしつつ専門性も提供できるような仕組みについて、何か工夫ができないかといったお言葉も頂戴しましたが、そういったことも非常に貴重なご意見だったと思います。学校だからできる生身の体験、友達や先生との関わり合いというのが大事だということもその通りだと思いながら、お聞きをしました。

さらにきめ細かな教育ということで、学級数だけではなく規模というお話もありました。国の制度として、高校では40名を1クラスと考えるのが全国的なベースとなっており、本県でもそれを基本にしております。現在、小学校で少人数教育が進んできておりますが、この考え方を今後どうしていくのか、国の方の判断もあると思います。県独自で少人数にしていく場合には財政的な問題など難しいハードルがあるのですが、きめ細かな教育という視点でできることを考えていく必要があるのかなと拝聴をしていました。

本日、総合教育会議の報告もありましたが、この夏、来年度の高校の定員の設定にあたり、定員減になる学校やその市町の首長さんからいろいろなご意見を頂戴したり、9月の議会でもたくさんの議論があったりしました。そうしたことを踏まえ、学級編制や中長期的な高校のあり方について抜本的な議論をしなければいけないという論調が高まり、知事主宰の総合教育会議も開催しながら、高校のあり方を検討していく流れになっていきますので、このあり方検討委員会に寄せられる期待というのも大変高まっているところです。総合教育会議の方でも高校のあり方について議論をしながら、この2つの会議を積み重ね、情報交換もしながら、今後議論を深めていくことになるかと考えています。この後、このあり方検討委員会は年度内に3回程度開催を予定しています。委員の皆様方には、恐縮ですが引き続きのご検討、ご意見をたくさん賜りたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

(委員長)

皆様多様なご意見を本当にありがとうございます。それからこのアンケートについて先程信憑性の検討が必要というご意見もありましたが、最低でも4割以上の回収率があり一般の企業アンケートなどと比べると大変高い回収率ですので、これは事実としてベースにしながら考えていくことは問題ないと思います。

私からは2つのことを申し上げたいと思います。

先程教育長から学科や定員の問題などが総合教育会議などで議論されるとのことでしたので、あえて申し上げます。これからも設置されていた方が良くと思う学科について、私

はもともとエンジニアリング出身ですので、各項目の相関係数を計算してみました。中学3年生、中3保護者、高校2年生、高2保護者、卒業生、教育関係者、企業、その皆さんのご意見がこの13の学科についてどのような相関があるのかについてです。相関係数というのは、完全に一致していれば1です。全く無相関だと0。マイナスの場合は、完全な負の相関ということですが、この場合は0から1になります。そこで「設置されていた方が良いと思う学科」についてどのような相関係数になったかと言うと、まず中学3年生と中3保護者は0.872です。高校2年生は0.957。高2保護者は0.693。卒業生は0.917。教育関係者は0.32。企業は0.58。ということで、中学3年生、中3保護者、高校2年生、高2保護者、卒業生、企業、教育関係者、すべて合わせて教育関係者の相関係数が非常に低いという結果となりました。0.3は本当に弱い相関しかないということです。教育関係者と中3保護者との相関関係は0.33。高校2年生、高2保護者、卒業生との相関が0.5程度です。私の想像ですが、教育関係者の皆様は現状維持と言うか現状肯定バイアスが非常に強く、現在ある学科などが良いという前提に立たれてしまっている。一方、中学3年生、保護者を含め企業関係の方は、まだ中3という直接のステークホルダーとの相関が高いです。教育関係者が最も相関が低いのは分析した事実です。このアンケートから進学したくない高校に行った人の満足度が低いという結果や記憶では前々回の会議で、職業科において満足していない高校に行った人がその関連に就職する率が極めて低いという結果が示されていたことから、現在どれだけの方が富山県に就業しているのかという客観的な数値と学科の卒業生や学科数、定員をリンクさせて考えていく必要があるのではないかと思います。教育関係者の皆様が中学3年生、その保護者、高校2年生、高2保護者、卒業生、企業の方との相関がどの学科が必要かという項目において最も低いことから、県民に寄り添い、子どもファーストの発想に立つならば、今後の総合教育会議やその他の席で教育関係者の意見を重視して決めるということは、このアンケート結果からするといかがなものかと思えます。もう少し他の県民の皆様の意見や直接のステークホルダーからの意見を重視する形で意思決定をお願いしたいと思えます。

2点目は、今回17年ぶりにアンケートをしていただき、本当にたくさんの知見が得られてありがとうございました。このアンケートを、例えば5年に1度といったようにできないのかと思えます。現在は小中学校、高校にも1人1台のタブレット等が配られているわけなので、ITの力でもっと簡単にこのアンケート調査が行えるのではないかと思います。17年ぶりに大変なご努力があったと思いますが、もっと簡単にこのアンケートを取れるような形を考えていただき、少なくとも5年に1度くらいはアンケートを行い、供給側である県や市町村の教育委員会の論理だけではなく、県民が求めているものとギャップがないかを常に見るといった姿勢が必要ではないかと思います。教育関係者の方が圧倒的に多い中で大変厳しいことを申し上げましたが、是非ともご理解していただいた上でより良い県立高校のあり方、そして学科編制のあり方をご検討いただければと思います。

5 閉会

11時45分、議事が終了したので、委員長が終了を宣し、進行を戻した。その後、司会が閉会を宣した。